

主に向かって祈ること

102 編の頭書は印象的で「祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人（時間の制約に生きる人？）の祈り」となっている。「主よ（Yahweh）、わたしの祈りを聞いてください。この叫びがあなたに届きますように」という祈りで始まっている。直接「悔い改める」という表現は登場しないが、この詩は古代教会の7つの悔い改めの詩編の5番目である。信仰共同体であるイスラエルの民、キリスト教会の存在理由、そのミッション（使命）は祈ることである。先日、靖国神社・天皇制問題を共に考え、多少行動してきた仲間である札幌教会の浦瀬祐司さんが来られ、悲惨なガザ地区でのハマスとイスラエルの爆撃をテレビやSNSで知り、無力感を覚える中で教会の使命は「祈ることですね」と言われて共感を覚えた。私たちはどれほどシャローム（平和）の到来のために祈っているのだろうか？ 祈りと行動の二元論ではなく、祈りこそ「行動」であることを覚えよう。

まず、祈りのこの詩編を素読、できたら、声を出して読んでみよう。なぜ、4節～12節、19節、24節～28節は二文字下げて記述されているのだろうか？ 素朴な問いである。13節～18節、20節～23節、29節はそれほど明確ではないが、シオンの王権確立の神殿礼拝の神学、シオンの再建神学である。その枠に、「心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の祈り」が挿入されているという形態か？

1. 立ち上がって憐れんでください (13 節)

主なる神は（天上の？ 20節参照）王座についておられる。王座に座って静かに堂々とされているだけでなく、立ち上がって（14節）、地上を見渡し、目を注ぎ（20節）、シオンを、あなたの僕らを、すべてを喪失した者を、捕らわれ人を、死に定められた人々を「憐れんでください」と祈る。恵みのとき、定められた（救いの？）の時がきたのですから！

2. 主の栄光の現臨・顕現 (16 節、17 節)

主なる神は憐れみの神（貧しい民と自己同一化される神）であると同時に栄光の主であり、シオンを再建しつつご自身を現されるであろう。栄光は単なる勝利を超えた輝きである。その栄光は、すべてを喪失し祈る者の上に、呻く捕らわれ人の上に、死に定められていた人々の上に輝く。

3. 諸国の民と諸王国の召集 (23 節)

シオン・イスラエルの賛美は(19節、22節)諸国の民にも分かち合われるために、諸国の民は「共に一つに集められ」、主に「奉仕」する。Yahweh を中心にして全諸国が一つになる。壮大な夢ではあるが、かつて日本（天皇国家）を中心に全世界を一つにする「八紘一宇」が大東亜戦争のイデオロギーとなった、その近似性と相違に注意せよ。

4. 終末論的希望 (29 節)

最後の節は「あなたの僕らの末は住むところを得、子孫は御前に固く立てられるでしょう。」で終わる。この節もいわゆる「シオニズム」に利用される危険がある。あくまでも終末論的希望、他者を抑圧

しない希望であること、人は終末の一步手前に (Vorletzten, Penultimate) 生きている謙虚さ (熱狂主義に陥らず) 希望をもって現在を生きるように (絶望せずに) 勧められている。

5. 心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の祈り

以上の枠組みを覚えつつ、「心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の祈り」を味わってその印象を語り合おう。煙、影のような人生、渴いた草、枯れる草、食欲もなく、孤独な廢墟のフクロウ、屋根の上のたった一羽の鳥、敵、嘲る者らに囲まれている、パンの代わりに灰を食べる、生涯の半ばで衰え、短い人生となる (早世とはどのくらいの若さをいうのだろうか?)、着物は古くなると着替えられるが、神がそのように私たちを交換可能なものとして扱わないように祈るのであろう。着替えのように、取り換えられる、とは目に浮かべることのできる、面白い比喻である。天地は滅び、人も滅びるが、神は滅びることはない。変わることはない、神の歳月は終わることがない、と。

最後になったが、3節「苦難がわたしを襲う日に/御顔を隠すことなく、御耳を傾け、あなたを呼ぶとき、急いで答えてください」も心に響く。御顔を隠すことなく、「急いで」応答して下さい、今でないと間に合いませんという「急いで」という副詞は「救急車」の到着、緊急対応を求める重傷者の祈り、願いでもあろう。